

創学舎ニユース

No.235

世界が敵に

まわった日(その3)

「おとしまえをつけてやる」と思いながら過す少年時代であった。しかし、現実には「おとしまえをつける」のは困難である。そういう時、私の心を満たしたのは空想だった。体を鍛えて、自分をなぐった連中をこてんぱんにやつつけている姿、母子家庭の貧しさを馬鹿にしたやつもなぐらなきや。大金持ちになって、近所のババアどもを見返してやる。こんなことを空想する度、その一瞬は心がおどるのであった。

ところで、「イジメ」にあったことがある人はいないだろうか。同級生、先輩、他校の生徒……。教師から「イジメ」に近い扱いをつけることもある。今日もあの重い気分を味わうのか？ 楽しいこともあるけど、「あの事」に誰か触れるのではないかと、心のどこかで警戒している。苦しくてたまらない。いつそ死のつか？ クラス替えがあるので、「今度の学年こそ」と期待していたら、前の学年の時以上に、自分の居場所がない。自分のどこが悪いんだろう。あの人とあの人のさえないなければ……。先生は何も分かってくれない。

親に話しても、逆に説教されるだけ。誰にもいえない。自分がこんな状況に追い込まれていること自体、自分のプライドが許さない。

こんな気持ちを味わった人、味わっている人は、私の空想も理解できるかもしれない。ひょっとしたら、あなた自身が、こんな空想をして、日々を送っているのかもしれない。あるいは、私の予想もつかないようなことを思い描いているのかもしれない。

さて、「おとしまえ」はつけるべきなのか？ 時期による、程度による、相手による、手段による、気質による、価値観による。こんな言い方しかできない。また、直接その人に向かって「おとしまえ」をつけることだけが最善な訳でもない。何より、「イジメ」られた人は、相手がいやがることをするのを人一倍嫌っているはずではないか？

私の「おとしまえ」にもどうだろう。小学校を卒業し、中学に進むこととなったが、状況は変わらないことが予想された。(道一本はさんで、小学校と中学校が位置しており、小学校六年生のときと同じ顔ぶれで中学一年生になるだけであった。)でも私は変わりたかった。泣き虫と思われないようになること、弱いと思われないようになること、また心の中で広がっていく死の予感を払拭すること……。自分の中で、これらの思いが強くなっていった。

まず、勉強を頑張ることにした。母は元教師で、しかし経済的理由で学問への志は断念した人だが、勉強には人一倍価値をおいていた。少しでも悪い成績をとると、激しくなじた。学問をすることで身を立てること、学歴を手に入れた心配の少ない人生を歩むことを体の弱い私の最善の方法と想っていたようだ。私は母の意にそうところが、母を喜ばせることになると充分に分かっていったし、また、勉強で頑張れば一目置かれることも実感できていたので、それなりに努力はした。次に、体を鍛えることを目指した。野球部に入ると、下手くそといわれつつも狂ったようにトレーニングをした。死ぬんだら死んでいいと思っていた。中でも私も心をとらえたのは、走る快感。小学生のときの「風を切る」喜び。あときは、途中で脱落し、惨めな結果となったが、「風を切り続ける」ことをずっと夢にみていた。中一のとときで、毎日十キロ、中二・中三では毎日十五、二十キロは走っていたと思う。通学のときも走る。練習の空き時間も走る。そして、中二の体育祭。二千メートル走に出ることになった私は、運動もやれる自分になっていた。中三生でも私についてくれるものはいなかった。勿論中一はみんな遅い。ただ中二の奥平君(後に名ランナーとなる。)この人にだけは勝てなかったが、運動で賞賛を浴びている自分がいた。

気がつくくと、体も大きくなっていった。たちくらみの回数も月に一、二回。これはひよっとすると、生きられるかもしれない。トレーニングのおかげで、力も強くなっていった。これはひよっとすると、もうビクビクする必要はないかもしれない。もっと、堂々としていいのかもしれない。もっと、自分の意見を主張してもいいのかもしれない。私の中では、希望が、小さな希望が次々と育っていった。

だが野球は、なかなか上手にならなかった。原因の一つは、視力の低下である。中二の頃はボールを見づらくなっていたが、母に眼鏡を買ってくれよう頼むことはしなかった。貧しい暮らしの中で、懸命にやりくりしている姿をみると、とてもいい出せなかつたのである。とにかく、ボールがよく見えないというのはきつかった。外野を守っているのだが、飛球への反応などは守るのが怖かった。エラーをすると先輩やチームメイトに怒鳴られるが、そのときはひたすら謝るばかり。バッターボックスに立つても天気の良い日は、苦勞した。もっと楽しみたいのに……。

そんな気持ちで練習をする私に、突然幸運が訪れた。母校の先輩でプロ野球選手になった方がいたが、その人が故障してしまい治療のために帰省されたのがきっかけである。治療の合間

に母校の練習を見に来られるのだが、私を見る
とピッチャーをさせるようにと、顧問の先生に
進言してくださいました。以下次号。(小林)

教育「名言」の紹介(10)

ひとりの信仰の騎士が他の信仰の騎士を助

けることはけつしてできない。

《出典》ゼーレン・キルケゴール(デンマーク・

一八一三—一八五五『おそれとおのき』)

解説 自立のための闘いは、だれも代われな

い。どんなに親しい友人も、代わってやること

ができない。どんなに理解のある親でも、わが

子の自立のための闘いは、代われない。代わっ

てはいけない。人は、一人で、闘わなければな

らない。そして、その孤独な戦いを続ける中で、

初めて、友人の支えが見えてくる。親のありが

たさが見えてくる。しかし、助けることはでき

ない。信仰の騎士とは、この場合、まさに自立

した個人の象徴である。人が、本当の意味で、

自分なりの人生を生きよとすると、孤独と

不安と絶望は必然であり、だからこそ、その必

然を越える「飛躍」(出会い・パラダイム転換)

が、人生には不可欠なのだろう。キルケゴール

は、四二歳の短い生涯に、数多くの作品を残し

た。それらは、小市民的安定や大衆社会状況に

対する抗議でもあったが、本質的にはすべて、

彼自身の魂をめぐる苦闘の歴史であった。世間

と安易に妥協したキリスト教会への抗議を続け、
理解されぬまま、嘲笑のうちに逝った。しかし、
その孤独な単独者の思想は、むしろ、今日の日
本社会の状況において、ますますその意味を発
揮するように思われる。

(アガトス教育研究所)

トーチライト

私が初めて自殺を考えたのは、高校三年の五
月か六月でした。今でも鮮明に覚えています。

一般的に、人の顔を見て笑うことは、失礼だ

と言われていますが、高校に入学した途端に、

私は他人から、ある理由によって、私の顔を笑

われるようになりました。主に同年代の人達か

らだったのですが、ただの知り合いや友達から、

さらに道行く知らない人々からも何度も笑われ

からかわれました。この体験は、三年間続きま

した。

初めのうちは、自分の怒りや不満を外に出し

ていたのですが、いつのまにか私は、様々な感

情を自分の中に閉じ込めるようになっていまし

た。心の中に堅い殻を作ってその中に入り込ん

だのです。自分を守るためでした。傷ついて、

怒りを覚えても、気にしていないふりをしたり、

私のことを笑っている人達と一緒にあって、自

分を笑ったりしました。

息が詰まるような三年間でした。嫌で嫌で仕

方ありませんでした。そしてつもりに積もった
ものが溢れ出た結果が、冒頭の出来事です。あ
る日、家に帰るために、いつも使っていた電車
に乗りました。田舎なので、一車両しかありま
せん。後ろから乗り込み、一番前まで行くこと
しました。すると私の左側に座っていた女の子
のグループが、いつものように笑ったのです。

もう耐えられない、もう無理だ、と思い、死ね

ばこの苦しみから逃れられることに気付いたの

です。衝撃でした。それまでは単純に、自殺を

する人は弱い人だ、と考えていましたから。そ

して、横を向いて立っていても顔を見られて笑

われるので、前を向いたのです。それから先、

駅に着くまでの記憶はありません。

一人の人が、私が気にしていることを言った

ので、怒ったことがあります。そして、彼は

「ジョークだよ。」と言いました。ジョークと考

えることができれば、どれだけ楽に生きていけ

るかわからないのに。言っ人にとっては一瞬の

ことでも、くやしやかな、言われた人にとって

はそうではありません。

今となつては、ある程度客観的に過去を振り

返り、分析できるようになりましたが、この体

験によって生まれた傷が消えることはないでし

よう。同年代のグループが前から歩いてきたと

きに、顔を見られないように下を向くことはな

くなりませんが、今でも自分の周りで笑い声が

起こると、自分が笑われていないことをつい見
回して、確かめてしまいます。大学に入つてか
ら、卒業アルバムを見る機会があつたのですが、
見たその日から夢を見るようになりまし。ア
ルバムはそれ以来見ていません。

この癒えない傷をずっと抱えてこれから先、

生きていかなければならないことと、この体験

が自己の基盤になってしまっていることによつ

と気付いたのは、大学を卒業するときでした。

堅い殻の中に閉じこもるあまり、感情を表に出

さなければいけないときにできなかったり、人

の愛を求めながらも拒絶したりしてしまいました

したが、この体験があつたからこそ、世界や人

間をより深く見られるようにもなつたのです。

人生が闇にしか思えないときもありましたが、

暗い山道を照らすトーチライトの光は、常に輝

いていました。それは、好きな女の子であつた

り、外国語であつたり、勉強を通じて経験する

ことのできた様々な事柄でもありましたが、し

かし何よりもそれは、人々との触れ合い、コミ

ュニケーションへの渴望であつたのです。

(武内)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、

「ご希望があれば、創学舎ニュースを無料

でお送り致します。在籍した教室までご

連絡下さい。